様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０３８８

研究課題名（和文）ステレオタイプに関する慣用表現と文法現象の研究

研究課題名（英文）Stereotype Research on Idiomatic Expressions and Grammatical Phenomena

研究代表者
青木　三郎（AOKI, Saburo）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：５０１８４０３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は言語表現におけるステレオタイプの研究である。ステレオタイプは社会心理学的アプローチと言語的アプローチがあるが、本研究では社会集団の特徴についての説明や、ある社会での行動の正当化と関わる言語活動に注目した。説明や正当化は、社会通念を基盤としており、そこから行われる推論には思考レベルのステレオタイプが密接に関わる。本研究ではステレオタイプの関係する事象は文法範疇としての統一性はないが、語彙と語彙の意味関係、文と文の推論関係を理解する上で重要なファクターであることを明確にした。また慣用句、定型表現、故事などの言語的特徴を明確にし、言語教育への応用とあるべき辞書の記述について提案を行った。

研究成果の概要（英文）：This research investigates stereotypes in linguistic expression. There are two approaches to stereotypes: the social psychological approach and the linguistic approach. This research focuses on the explanation of features of social groups, as well as on linguistic activity involving the justification of actions in a certain society. Explanation and justification are based on socially accepted ideas, and inferences made from such ideas are closely connected to thought-level stereotypes. The stereotype-related phenomena targeted in this research are not unified in terms of their grammatical category. However, it is shown that stereotypes are an important factor in the understanding of the semantic relationships between lexical units and the inferential relationships between sentences. In addition, this study clarifies the linguistic features of idioms, formulaic expressions and proposes some applications for language education and the lexicographical description of such expressions.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：ステレオタイプ　社会通念　認知基盤　慣用句

１．研究開始当初の背景

本研究は社会的背景と学術的背景の認識が基礎にある。社会的背景とは、現代社会が急速に複数言語文化状況を呈しているという現実である。従来のような同質の言語を使用する地域社会の中では、同質の知識をもった人々どうしの言語コミュニケーションはさほど困難をきたさない。しかし様々な言語文化を背景にもった人々が生きる社会では、自分の「常識」が相手の「常識」とは限らず、誤解と偏見による差別、摩擦は常に起こりうる。また「地球村」の一員として国境を越えてグローバル企業に身をおく人々にとって英語の重要性と並んで、各社会・民族の担う諸言語の尊重と相互理解は益々重要性を帯びている。このような社会状況を背景にして、言語研究は国際コミュニケーションに資する研究として、その基礎を築いていかなければならない。このような学術的認識に立って、本研究は、「常識」「社会通念」（これをステレオタイプと呼ぶ。）の言語的分析を行う。その際に有効なのは、人間がどのように世界を捉え、概念化し、伝達・交流するかを研究する認知言語学のアプローチである。本研究では社会通念に基盤を置く推論と、定型表現、慣用句などの表現の接点を見出し、融合させることによって、新しいコミュニケーションモデルを提案しようという発想に至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本語・英語・フランス語のステレオタイプ表現の機能と構造の分析を目的とする。ステレオタイプは特定の社会におけるコミュニケーションの認識基盤である。没個性的な「紋切り型」表現を作り出すと同時に、言語による相互理解を安定させる「標準型」の認識基盤でもある。「紋切り型」は慣用表現）（成句、ことわざ）・定型表現（社会的役割の特有な表現、映画・芝居などのせりふなど）に顕著に現れる。「標準型」の認識基盤は、社会通念・常識を形成し、日常言語による推論表現を特徴づける。本研究ではステレオタイプのもつ「紋切り型」と「標準型」の 2 側面を基軸にして、慣用表現と推論表現を体系的に記述し、新しいコミュニケーションモデルを提案する。

３．研究の方法

本研究は４つのアプローチによりステレオタイプと言語の関係を解明する。

①ステレオタイプに関する諸科学の基礎文献の批判的検討：アルフレッド・シュッツ（『社会的世界の意味構成』）、ジョージ＝ハーバート・ミート（『シンボリック行為論』）、ウォルター。・リップマン（『世論』）、アモシ（『固定観念とステレオタイプ』）などの基本的文献を批判的に検討し、これにより哲学・社会科学・心理学に対して、言語学（認知言語学）におけるステレオタイプ意味論の理論的位置づけを行う。

②報道文の論理的ステレオタイプ：日英仏語の報道記事（新聞・雑誌）の論理的展開に関して比較検討する。論理的展開の基盤には世論の「常識」があり、新聞ごとに段落から段落への論理的つながり、展開のパターンの特徴を抽出する。これにより各言語の情報伝達のステレオタイプに光をあてる。

③文章のタイプ（語り・記述・説明・論評）のステレオタイプ研究：報道文のみならず、記述文、説明文、論評文の構文的特徴と語彙的特徴を記述する。各文のタイプには、それぞれステレオタイプがあり、構文・語彙特徴と文の接続（順接、逆接）との相関関係について検討する。

④「紋切り型」としてのステレオタイプ研究：「紋切り型」は慣用句、比喩、メタファー、メトニミー、総称文、習慣文、省略文などの構文・意味現象に現れる。慣用表現は慣用句（成句）とことわざに大別することができるが、このような語彙と文法の知識だけでは必ずしも理解できない単位について、言語教育（日本語教育、外国語教育）においてどのように教授すればよいか、学習者と教師の双方の視点から検討する。

以上の４つのステレオタイプ研究を中心に、最終的には多角的な情報を盛り込んだ多言語辞書（日・英・仏語）のステレオタイプ慣用表現辞書のあるべき姿を探る。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

①ステレオタイプの創造性：定期的に読書会を開き、ステレオタイプに関する諸科学の基礎文献の批判的検討を行った結果、ステレオタイプの問題は、社会科学、心理学分野における文献が圧倒的に多く、言語学ではステレオタイプを「定型表現」に関わる言語形式という範囲で捉えることが主流であることが明確となった。社会科学・心理学ではステレオタイプを偏見・誤解・没個性的概念として否定的に捉える文献が多いが、しかし、クレイグ マクガーティ、ラッセル スピアーズ、ビンセント・Y. イゼルビット（２００７）のようにステレオタイプのメカニズムを解明することにより、融通のきかない「固定観念」ではなく、世界を理解するための「説明力」として、その価値を逆転した。先行文献の詳細な検討により「創造的ステレオタイプ」へと研究方向が大きくシフトした。

②言語学におけるステレオタイプという概念の有効性については、主に日本語・フランス語・アラビア語という全く言語系統と文化の異なる言語間における文法現象をとりあげ分析を重ねた。結果的にステレオタイプは文法範疇として捉えることはできず、したがって統一した文法現象として記述することはできないという「自明な」結論に達した。しかしながら、ある特定の言語集団が形成するステレオタイプ的意味は何らかの価値概念を必ず包含するものであり、意味と意味の

つながりにおいて、重要な役割を果たすことを明らかにしたことは本研究の主要な成果である。具体的には以下の現象を観察・分析した。a.フランス語の comme（日：～ような）による強調表現のメカニズムについて：例えば、comme un Turc （トルコ人のように）は屈強であることを示すが、それはトルコ人が一般に屈強だと思われているからである。しかし comme 自体には屈強を表す意味はなく接続詞として前件と結合するだけの機能を果たす。A comme B（B のような A)という構造においては B は A の極性概念として同定される。極性概念の一部としてステレオタイプが位置づけられるのである。b. 同語反復文（例 Un chat est un chat、猫は猫だ）における un chat のステレオタイプの解釈の相違。同語反復文においては前件（主語名詞句）と後件（属詞名詞句）が同語であるにも関わらず、前件のステレオタイプと後件のステレオタイプが異なると考えることができる。語彙意味論では同語反復文のもつ論理的矛盾を乗り越えた説明ができない。ステレオタイプ意味論を導入することによって、前件と後件の名詞句は言語主体の属する二の異なる集団の表す概念であると捉えることができ、矛盾なく同語反復を説明できるのである。c. 相反する意味を担う二つのことわざにおけるステレオタイプの価値。ことわざは、しばしば別の反義的意味をもつ。例えば「好きこそものの上手なれ」は「下手の横好き」と反義である。これらの表現の実際的使用を調査してみると、二つの異なった「集団的真理」すなわち「常識」が思考の基盤となっていることが理解されるのである。e. 日本語の副詞ヤハリとフランス語の副詞 toujours における前提事項のステレオタイプ的意味の相違に関する対照研究。フランス語の toujours（いつも、ずっと、相変わらず）は事象が時間的に持続することを示すが、apportez-moi toujours un café. （とにかくコーヒーを持ってきてちょうだい。）のような使用では前文脈において口論・意見の対立が想定され、そこに立脚して、どんな異なる意見にせよ価値が否定されない内容を再確認するのである。価値が否定されない内容こそが話者にとってのステレオタイプであると捉えることができる。日本語のヤハリ（ヤッパリ、ヤッパ）は話者が一度想定した内容を再度確認することを示しており、toujours のもつ口論・対立といった文脈は必要としない。d. アタリマエ、トウゼン、シゼンニ、normalement、naturellement などの副詞についての研究。これらは normal（常識的）、naturel（自然的）という語が構成要素にあるように、前件に対して、常識に基づいた推論により、結論を導くことを示す。これらの副詞が現れるのは、話者の常識では受け入れられない非尋常的な状況に接したときである。話者の信じるステレオタイプ的知識に照らし合わせて判断するのが「当為」である。

このようにステレオタイプという認知的意味は、文法形式の様々な範疇に現れるが、同時にステレオタイプ意味論は文法範疇を超えて、単文にせよ、複文にせよ、文的意味の関係づけが問題となる現象において有効に機能することが明らかになった。今後、認知意味論的視点からは、ステレオタイプ的意味とプロトタイプ的意味との共通性、および相違点について論考を深めることが課題である。

③　日本語慣用句の「紋切り型の表現」としての性質をステレオタイプ研究として検討を行った。「慣用句」（例：「腹が立つ」「目から鱗が落ちる」）とは、複数の語から構成されている表現で、句全体の意味がひとつのかたまりとして固定しており、句を構成する個々の語の意味の総和からは導き出せない。また、慣用句における構成語同士の結びつきが強く、個々の語を類義語や対義語に入れ替えたり、省略したりすることは通常できない。よって、慣用句は意味的にも形式的にも固定しているもので、従来「紋切り型の表現」（stereotyped expressions）とされてきた。本研究では、日本語のコーパス（「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」）における慣用句の用法、及び辞書における慣用句の扱いを検討し、慣用句の「紋切り型の表現」としての性質について、以下のことを明らかにした。

I. 慣用句の用法上のパターン

コーパスデータを観察した結果、多くの慣用句には活用形や文型の偏り、また、特に好まれている共起語があることを示した。また、コーパスを利用することにより、個々の慣用句の用法（活用形、文型、共起語）にどのような傾向があるかを明らかにし、日本語の母語話者の直感や、手作業で集めた少数の用例だけではなかなか気づきにくい用法上の傾向が把握できることを示した。（例：「あっけにとられる」は「あっけにとられ（て）～をする」といったパターンが好まれ、また、「あっけにとられ（て）」に後続する動詞は、「見る」「見つめる」「眺める」などの、視覚的な認識を表す動詞が多い。）なお、このような用法上の偏りが個々の慣用句の意味的特徴を反映している場合があることも示した。

　慣用句は「紋切り型の表現」で、言語における「イディオム原則」を反映していることは従来指摘されてきた。本研究では、慣用句の活用形・文型・共起語・意味にかかわる、文レベルでのパターンが存在することを示し、用法上の「紋切り型性」もあることを明らかにした。なお、このような「パターン」は母語話者にとって言語運用の経済性につながるのに対し、日本語学習者にとっては、誤用やコミュニケーション上の障害の原因となる可能性があることを指摘した。

II.慣用句の「変化可能性」と「変異形」

「慣用句」は、構成語同士の結びつきが強く、個々の語を類義語や対義語に入れ替えたり、

省略したりすることは通常できないという特性がある。しかし、本研究では、コーパスデータを観察した結果、日本語慣用句の中には、句の構成語が交替したり、句の拡大形式・省略形式が頻繁に用いられたりするものがあることを明らかにした。具体的に、次の5つの「変異形タイプ」を抽出・考察した：1）類義関係にある変異形、2）対義関係にある変異形、3）自動詞形・他動詞形の関係にある変異形、4）慣用句とそれに対応する複合語、5）内容語の付加・省略による変異形。また、コーパスを利用することにより、個々の慣用句の「変化可能性」をより明確に把握できることや、内省や少量のデータだけではなかなか発見しにくい変異形や対応関係を明らかにできることも示した。一般言語学の研究や、慣用句辞典においては、慣用句は「紋切り型の表現」として処理されがちであり、先に述べたような「変化可能性」（「変異形」）は注目の対象とされず、この性質が把握されていないことが多い。本研究では、実際に個々の表現の用法から判断すると「固定性」と「変化可能性」間の＜ゆらぎ＞の現象が見られることを明らかにした。よって、慣用句は「イディオム原理」を反映しながらも、「自由選択原理」をある程度反映していると言える。

III.辞書における慣用句の扱い

本研究では、コーパスデータに基づいて明らかにした慣用句の用法（①活用形・文型・共起語等）、及びコーパスから抽出した慣用句の変化可能性（②変異形）が、慣用句辞典においてどの程度まで、どのように扱われているかを明らかにするために、一般に用いられている慣用句辞典を7冊調査した。その結果、慣用句辞典においては、個々の慣用句の用法を十分かつ正確に記述していない傾向があり、また、個々の慣用句を語彙・構造的に固定した表現として提示する傾向が強いことがわかった。すなわち、慣用句の用法上の偏りも、変化可能性も、十分に示していないのである。

本研究の結果から、慣用句に関する先行研究の成果、コーパス分析の結果、慣用句辞典の編纂の三つを密接につなげていくことが必要であることが明らかになった。辞書の重要な機能の一つは、ことばの用法を提示することである。よって、慣用句辞典において、個々の慣用句の活用形や文型の偏り、共起語の特徴、また、語彙・構造上の変化可能性に関する正確な情報を示すことが求められる。本研究では、慣用句の「固定性」と「変化可能性」間の＜ゆらぎ＞の現象こそが記述されるべきであり、辞書においても、個々の慣用句にかかわる大きな（文レベルでの）形式的・意味的なパターン、及びその変化可能性（変異形）に関する情報を体系的に示すことが必要であると主張した。

以上、言語学においてのステレオタイプ研究の重要性を掘り起こし、「創造的ステレオタイプ」という方向付けから、言語活動における集団的知識の表象としてのステレオタイプと日常生活の推論、ことわざのような特殊な一般的真理と（反義を含めた）表現の多様性について研究の方向性を定めた。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

①本研究の成果を国内の学会やシンポジウムで報告することにより、多言語におけるステレオタイプの文法的事象および日本語慣用句の「紋切り型の表現」としての性質に関する新たな見解を提示した。また、日本語のコーパスを活用した慣用句研究の可能性と意義を示した。

②ヨーロッパの学会やシンポジウムにおける研究発表、及びヨーロッパで出版された著書における論文（英文）により、日本語慣用句に関する研究成果を海外に発信し、世界の言語におけるステレオタイプ・慣用句の研究と日本語慣用句の研究の接点を示すことができた。また、ヨーロッパ（フランス・ポーランド）およびアラビア語圏の研究者との共同研究活動の可能性の糸口を見つけることができた。

(3)今後の展望

①本研究成果の内外への発信力を高めるために、国内・国外を問わず研究発表・論文発表を積極的に行っていく。

②認知言語学におけるステレオタイプ・プロトタイプの必要性と有効性をさらに考察し、理論的に厳密な作業を深めていく。

③日本語慣用句の「紋切り型の表現」としての性質、及び「固定性」と「変化可能性」間の＜ゆらぎ＞の現象をさらに明らかにするために、「変化可能性」に注目し、話し言葉と書き言葉における慣用句の臨時・創造的な用法を検討する（例：「寝耳に大雨」、「目から鱗が十枚ほど落ちた」）。

③引き続き「慣用句」「コーパス」「辞書」の相互関係を探り、日本語学習者向けの慣用句辞典の開発に向けて、辞書における慣用句の扱いにかかわる諸問題を探究する（例：慣用句辞典の利用者研究、学習者向けの辞典における慣用句の選出や記述方法など）。また、コーパスから抽出した慣用句の用例分析に基づいた電子データベースを構築する。

④ステレオタイプ研究をグローバル社会のアイデンティティの問題、社会の中の調整と協働に応用し、国際コミュニケーションに資する研究へと深めていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
青木　三郎.＜ただ＞の風景.文藝言語研究 58 巻、2010 年、1-15.［査読あり］
〔学会発表〕（計７件）
①ISHIDA, Priscilla. Beyond stereotypes: Patterning and flexibility in Japanese idioms. Intercontinental Dialogue on Phraseology: Language, Culture, Phraseology（国際シンポジウム）、2014 年 3 月 12 日、ビャウィストク大学（ポーランド共和国）。

②ISHIDA, Priscilla. The how and why of phraseology: Approaches to the analysis of Japanese idioms. フレイジオロジー研究会第 7 回例会のシンポジウム、2013 年 3 月 16 日、早稲田大学（東京）。

③ISHIDA, Priscilla. Japanese idiom variants in corpus data and in dictionaries. ヨーロッパのフレイジオロジー学会 2012 年度大会（Europhras 2012）、2012 年 8 月 29 日、マリボル大学（スロベニア共和国）。

④AOKI, Saburo. Un linguiste japonais, 35 après. ジャン・ペタールのテキスト言語学研究シンポジウム、2012 年 6 月 7 日-12 日、フランシュコンテ大学（フランス）

⑤ISHIDA, Priscilla. The representation of idiom flexibility in Japanese phraseological dictionaries. アジア辞書学会第 7 回国際大会（ASIALEX 2011）のシンポジウム(“Phraseology: A New Approach to Language Studies”)、2011 年 8 月 22 日、京都テルサ（京都）。

⑥ISHIDA, Priscilla. Towards a corpus-based approach to the treatment of idioms in Japanese idiom dictionaries. フレイジオロジー研究会第 3 回例会(国際大会)、2011 年 3 月 5 日、関西学院大学梅田キャンパス（大阪）。

⑦AOKI, Saburo. Naturellement P et normalement P. チュニジア・日本学術シンポジウム、2010 年 9 月 22 日、スース大学（チュニジア）

〔図書〕（計　3　件）
①AOKI, Saburo. Nathalie Wallian. Marie-Paule Poggi, Andrée Chauvin-Vileno (eds). Action, interaction, intervention, Peter Lang, 2014. 368.

②ISHIDA, Priscilla. University of Bialystok Publishing House, Corpus data and the treatment of idioms in Japanese monolingual dictionaries. In: Szerszunowicz, Joanna et al. (eds.), Research on Phraseology in Europe and Asia: Focal Issues of Phraseological Studies (Vol. 1), 2011, 27.〔査読有〕

③ISHIDA, Priscilla. Schneider Verlag Hohengehren. The effect of transparency on L2 learners’ comprehension of unfamiliar idioms. In: Pamies, Antonio et al. (eds.), Multi-Lingual Phraseography: Second Language Learning and Translation Applications, 2011, 8.

６．研究組織
(1)研究代表者
青木　三郎（AOKI,Saburo）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：５０１８４０３１

(2)研究分担者
石田　プリシラアン（ISHIDA, Priscilla Ann）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：１０４００６０７